令和４年度　学校評価シート（青梅市立東小学校・東中学校）　（学校関係者評価）

＜学校経営方針の重点＞

１　学習指導の充実　　２　生活指導の充実（小学校）、生活・進路指導の充実（中学校）

３　情操教育の充実　　４　小中、学園との連携

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
１　確かな学力	確かな学力を身に付ける教育活動を推進する	指導方法や指導形態の工夫・改善などにより基礎的・基本的な学力の定着と伸長を図る	習熟度別少人数授業（中ー英語）やＴＴ（小ー国語、算数、理科、体育、中ー数学、社会、理科、保体、美術、家庭、2･3年の一部授業）の充実を図り、分からないところを前の単元に戻って復習をしたり、繰り返し学習する。	A	A+B 評価 100％で、A評価が50％である。にとどまっており、目標達成に至っていない。	前時の振り返りや、必要に応じて既習事項の復習を行い、学力の定着を図る。	A	クラスの状況に応じて分割授業を行う等の工夫が見られ、学びも深まった。児童個々の能力を見極め、基礎学習の習得に取組むことで学習意欲を引き出している。	習得状況に差が大きいため、T2を活用するなど、個々の学習課題に対応した授業を工夫する。
			児童・生徒の考えを引き出し、意見や理由、説明など自分の思いを表現させる。	B	A+B 評価 90％であるが、A評価は14％である。知識を問う発問に注視していた。	児童・生徒の課題に沿った、また、考えが引き出しやすい発問の仕方を工夫する。	A	視覚的な授業展開による学習意欲の向上や積極的な発問などの効果は大きいため、今後も工夫をお願いしたい。	発問の仕方を工夫するため、教員一人一人が授業を振り返り、授業力を高めていく。
			学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」を養うため、課題の設定を工夫するとともにＩＣＴ機器を必要に応じて活用する。	B	A+B 評価 95％だが、A評価は22％である。ＩＣＴ活用には個人差がある。	ＩＣＴは手段であり、目的ではないが、有効活用に向けて研修を深める。	B	ICT の活用については、セキュリティや児童の能力差などの課題があるが、自立支援に活かす取組に期待したい。	主体的に学習に取り組めるように１単位時間の課題設定の工夫し ICT 機器を有効に活用していく。
			特別な支援が必要な児童生徒の学校生活支援シートを作成するなど、個に応じたきめ細かな指導を実施する。	B	A+B 評価が 90％だが、A評価が27％で、個に応じた指導には課題が残る。	学校生活支援シートの有効活用について検証し、学力向上に生かせるようにする。	B	発達に課題を抱えた児童への学習支援には不可欠であり、寮との連携協力を深めることで成果を上げている。	寮との連携の際に学校生活支援シートを用いるなど、児童・生徒の支援に活用する。
２　規範意識と社会性	規範意識と社会性をはぐくむ教育活動を推進する	挨拶・返事・言葉づかい・態度などの基本的な生活習慣の確立を目指す 進路学習を通して、望ましい勤労観・職業観の育成を図る	「ルールとマナーの覚書」の運用を通して、服装や挨拶など教員が共通実践を図り、生活指導を進める。また、不必要な情報交換をさせない指導を徹底する。	A	A+B 評価 90％、A評価は54％だったが、十分ではないと考える。教員の理解に差がある。	覚書の成果は大きいが、項目が多いため、全てを指導していく難しさがある。教員同士の連携を強化することで解消していく。	A	学園としても基本的生活習慣を身につける指導は重要であり、今後は連動した取組みとなるよう共通実践を進めていく意識が必要である。	形骸化しないよう、教職員の生活指導上の温度差を緩和する手段として、常に確認を怠らないようにする
			「ルールとマナーの覚書」を活用し、児童・生徒のセルフチェックを通して、常識や良識を養う。また、授業態度の振り返りも行う。	B	A+B評価が90％であるが、児童生徒への活用が不十分との認識と考える。	学活時間を活用するなど、児童・生徒自身がセルフチェックできる機会の確保を工夫する。	B	振り返りの機会については学園としても意識を持って理解を進め、生活場面に反映させていきたい。	セルフチェックする時間の確保と、チェック後の共有化と、指導に温度差が生じないようにする。
			毎日の日記指導や個別指導を通して児童・生徒理解を図り、いじめや他児からの威圧行為のない安定した学校生活となるよう支援する。	A	A＋B 評価が 95％、A評価が 63％と高い評価だが、いじめと思われる言動はゼロと言えない状況である。	個別の面談をこまめに行うなど、一人一人の状況を把握するとともに、いじめ対策委員会を中心に生活指導部が核となり、迅速な問題解決を目指す。	A	学校生活の個人面談は重点を置いて的確な指導が行われており、児童個々に応じて必要なアドバイスを受けている。	日記指導・個別指導の場を活用し、学年で共有を図るなど、地黄・生徒へ適切な指導を行い、安定した学校生活を目指す。
			進路学習を通して将来、児童・生徒が自立した社会生活を送れるようキャリアパスポートを活用し、キャリア教育を進める。	B	A評価が31％と低い結果である。キャリアパスポートの活用に課題が残った。	キャリアパスポートが、職業調べや職場体験等に生かせるよう、系統的な指導を工夫する。	B	高校進学が殆どであり学力に見合った進路指導により合格率も高いので、職業学習が自立に結びつくよう期待したい。	キャリアパスポートを活用し、児童・生徒自身が自立した社会生活をイメージできるようにする。

３　豊かな心と体の健康	豊かな心と体の健康を育む教育を推進する	道徳授業等の工夫・充実、また総合的な学習の時間（小学校）や自立の時間（中学校）における福祉体験活動・自然体験活動・体育的活動などを通して、豊かな心と体の健康を育む教育を推進する	いのちの日や道徳科の授業、更にＳＯＳの出し方教育を要とし、体験活動を通して生命尊重の教育を推進し、自他の命を大切にする心を育てる。	A	A 評価 50%と多いが、SOS の出し方には課題が残ったと考える。	自分も他人も大切にする意識を醸成するよう、学校生活、教育活動全体を通して実践していく。	B	体験活動が自分を守ることの大切さや方法を学ぶことにつながるため、児童の育成歴や特性理解を深めることは必要不可欠である。	道徳の授業を充実させるとともに、教育活動全体において自己肯定感を高める指導を実践する。
			ものづくりやおしゃれ村での栽培活動（中１を除く）・自然体験や福祉体験など小学校・中学校各学年の発達段階に応じた体験活動を計画的に実施する。	A	A+B 評価が 100%となった項目で昨年度と引き続き高い評価となった。	おしゃれ村・ものづくりは準備段階が大変であるが、福祉の先生の尽力が大きく、成果を出せている。	A	「めあて」に沿った内容で連携が推し進められている。 体験的活動が校外学習等の成果に表れており、学びと自立に対する効果は大きい。	自然体験等は本校の特色ある活動の１つである。福祉の先生の協力が不可欠であるが、継続して行い児童・生徒の喜びにつなげていく。
			新型コロナウィルス感染症予防対応を軸とした運動会やクラブ活動を推進する。また、教育相談（例えば担任との面談）等を通して、心身の健康の増進を図る。	A	A+B 評価 100%、A 評価 71%と高い評価となった。厳しい状況下を乗り越えるための努力の成果と感じている。	今後も感染予防に努めながら、その都度、状況を鑑みながら、最善を尽くし、運動会やクラブ活動をおこなう。	A	児童の健康と安全に細心の注意を払いながら学校行事に取り組んでおり、衛生観念を育むことで感染症予防習慣が身についている。	今後も感染症対策を講じながら教育活動を推進していく。状況に応じた衛生観念について、学園と協同して指導していく。
４　小中・学園との連携	小・中および学園職員と連携・協力した教育活動を積極的に推進する	小・中学校および学園職員との児童・生徒の情報交換を密にして、連携・協力した指導を行う	児童・生徒の問題行動について、日常的に寮と情報交換を行うとともに、学寮会を充実させ、連携・協力した指導の充実を図る。また、児童・生徒の善行や頑張っていることなどを寮と共有し、双方で誉め、自己有用感を高める。	A	A+B 評価 100%、A 評価 59%だった。寮と情報交換を密に行うことで、未然にふせぐことができた。	善行や頑張っていることに目を向けるように意識していく。今後も、寮と情報交換を密に行っていく。	A	児童の善行を評価し、取り組み意欲を向上させることで学校生活に反映している。発達特性や課題に関する情報共有についても、寮との連携を密にすることで事前に対応することが出来ている。	問題行動に注視してしまうが、善行についても寮と共有できるようにする。寮と連携した指導により、自己有用感を高めていきたい。
			月に一度の「授業公開週間」や日常の授業参観を通して、学園に児童・生徒の実態を把握してもらい、意見や感想を改善に生かす。	B	A+B 評価が 90%であるが、A 評価 27%である。児童・生徒の様子がどの程度、伝わっているかの検証が難しい。	授業公開週に限らず、学園の先生が気軽に教室に入り、児童・生徒の様子を見られるよう雰囲気作りに努める。	B	自立支援において学校生活の充実は学園としても重要な課題である。なお一層相互理解が進められるような働きかけに期待したい。	学校生活の様子を実際に見ていただき、そこから児童・生徒について共有できる環境づくりに努める。
			児童・生徒について情報交換やケース会議等を実施して、寮と学校が共通理解のもとで指導に当たり、互いに着地点を見出しながら課題解決や児童・生徒の育成を図る。	A	A+B 評価が 100%、A 評価も 59%だった。学園の先生方の目線と遊離していないことを望む。	今後も学園の先生方との報連相が円滑に進むようコミュニケーションを大切にしていく。	B	寮により情報共有や課題解決に向けた取組に差があるため、連携協力の推進を持って対応していく必要がある。	情報共有や支援方針会議等に積極的に参加する。目指す児童・生徒像を共有し課題解決を図る。

補足…学校教職員による「自己評価」の仕方

４段階評価　　Ａ：目標達成、Ｂ：ある程度達成、Ｃ：もう少し、Ｄ：できなかった

寮自立支援において学校生活の把握は学園として重要な課題である。

○４段階評価　　Ａ：目標達成、Ｂ：ある程度達成、Ｃ：もう少し、Ｄ：できなかった
を基準として、校内で教職員一人一人が学校を評価したものを集計した。
上記の個人評価中のＡ～Ｄの割合をもとに次のように学校としての評価をまとめた。

Ａ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 90%以上かつ全体に対するＡの割合が 50%以上

Ｂ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 70%以上

Ｃ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 70%未満（全体に対するＣ＋Ｄの割合が 30%超）

Ｄ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 50%未満かつ全体に対するＤの割合が 20%以上
（全体に対するＣ＋Ｄの割合が 50%超かつ全体に対するＤの割合が 20%以上）

（ただし、全体に対するＡ＋Ｂの割合が 70%以上であっても、全体に対するＤの割合が 20%以上の時は、一段階評価を下げてＣとする）